繪本豐臣勲功記

三編 十

へ遠13
2209
30

へ東13
2209
30

繪本豐臣勲功記三編拾之巻

目録

秀吉自望使降參横山城
厲こゝ好因茶發
宮佐山軍信治可成戰亂
厲叡山對陣

秀吉説義演諸所一揆

屬堅田合戰

坂井政尚戰死曩坂田浦

屬秀吉献謀

早稲田大学図書館

豊臣記三編巻之十

江戸　八功舎　德水　刪補

秀吉自望使降參横山城屬之好累起

絶壑井より小さ紀とりつく。井小隘る驢あり。大半を枝達人へ。謀計の奏小弼らゞ。慈ばず不仆秀吉ハ主君を交拷練まゝ。周しゞ帰陣とゝめ〳〵ば。藤吉郎のゝ美意し。家を軍裝ゐ。ゐ紀事小思ひ游く稟し出るゆう。金御陣と決し至るべこの地の行路大事小ひ。這遺得く御出馬あって。諸軍粉骨碎身し御勝利を得るゐ事。是等兩の義小あらゞ恐るゝ。這来御帰陣あらば。諸軍の功労も空しくなりて。這遺の勝利も消めら道理その功労の滅せざるゆう。横山の城を攻隘し。自軍の名を籠亟こゐ

たるべ。自軍十万余は勢ひ比たべし。横山の城は真ひ是なる城ひ台は
喝拓ゆて。敵を亡れひ激ちこれは今殺の如く自軍より数日の際
攻ることいへども軍卒辛多損傷のこと多く容易落城いたさざるべし。
備前城を攻落て自軍の名士を稠山に残ハ浅井の為ひ心腹の
病となりて自由を得ざ自然と困窮ひ及ぶべし。這度再び小谷を
攻るひ三双の助力なられん怖くハ小谷ひ余じ多くべ一隊をもつて
暫時ひ横山を攻陥さん。然るべ御帰陣はしなさるも御得利よろし
うるべしと言ひたるひ信長も。猶ひもとおがしゆ一ゆたべ汝愚量
ひ思起なべ横山城攻の事を任たべし。随意ひせよと宣ひる故
赤下歓び時刻を料まべ夜日も申は刻ひ。薫風はるる林野
ひ満く。天晴く涼氣起諸卒も大ひひ休息しれば是究竟

の胸ひ。と自勝こ千余人を率し。蹴進で勃然と横山城へ推寄
る。當城の麓守ひハ織田信包丹羽長秀依捕うこんで立ると
ども帰陣の徇あしひより。既ひ本陣へ率返せしうべ城中人ひ
喝ーこそ今日自軍惣敗こ形り。決も當城保護得まじくおもひ
風ならも。敵兵の退ひ一ことひろまもりて紛ーさよとおもひ百一本下
秀吉こ千余騎。強ひ奏ひ山も諸破を。小海も埋むとりの威
勢ひて。驀地ひ推進来り。横山の面関ひ隊伍を固め大ひ喊と
つくり。寄城兵卒と怖さしめ。攻撃んとする威を育せられば。城中の
軍門案の如く。強柔ぎ動揺るる。守将大ひ仕ち天猶不
敵の勇士ひまべ。些も屈せず諸士を撫ましし。既ひ稱えぬ陣頭
ひまべ門く必死こ覚悟して。骨肉を極めて防ひし。頗く殿死せ

木下秀吉
謀計をもつて
横山の
城兵を
降参
せしむ

よりぐ遁きぬ余なれバ思ひの侭ふ戦ふく。決死をるこそ本望なき。
と勇氣を含こて竟ふをふぞ。こ国村野村も這義よ同ト。偖ふ云とと
號めしくバ。賞来なくハおり（ども。遁きぬ石と国て是非なく。防戦
の備部をなさんとて。無るに木下藤吉郎ハ斯の如く戚を志めし。
城中の態を窺ふ。一結恐怖の容子なりしが。暮び防戦と国人（ら
西へ秀吉頻ふを意を察り。攻臨さん事難きふあらねど。必死の歎
を殺ん少ハ。自軍も幾多換亡とべし。城ぐふ自軍の有とあらバ
實ふトなの利なりとおのひ。情こ地ふ計策を徇謀し。恩賞横山
の城下ふ推寄せ。減をつう島流を弊薨。攻薨ら懲をみ〜れバ。
城中もこを防ぐんと。砲矢を飛く撲ゥけくう。秀吉ハ故意引隔
りし。後陣の中より馬を跳らせ。正一門地ふ馳来り。魁隊の兵士を呼び

返し。決して攻ることなき。信長公の命あると大音声ふ指揮されば進
隊の兵士膜様てるぐふ退き動めるを。秀吉西関の風ふ到り。例
の如き大音揚て。自将ふ一言竟ふたことあり。對面せんと呼たしバ。大
将大野木出佐ち門の寨楼ふ登陽。何事ふやと問るを。木下彼方
と謂作て謂ふ。浅井郎倉殿軍こそ外方ふ援助の勢もなし。
怨ふ当城なか怯まぢ。宋城せらる勇氣のみ感ぜるふも又
余り余り怨なぐら浅井父子滅亡しなば城を守り。戦死をるもなな
きぢ。久政長政今日なか。ぜ事ふ苦ふ城ふあり。ぞるふ是下
倣死を止り。再ぶ忠戦の事ハおるそぢ。無なき城ふ對激守。
急くの殺辛を労せしめ徒換ゃんとの了簡ハ。ぞ形ぐ拙ぢ所なら
ぢや。信長事ふより忠士を懐こ。ろ者の勇事を感ぐ。を道ふせめ

隅を事とし好まず。城を守ひて小谷ふ帰らべ。独幸一個も傷えぞ退
るせよとの命せるり。厳く防禦と止うて。退城あまと呼ばられば城会
仰所く悦ぶと大野木一個同心せぞ。是ハ歌の謀なり。今日軍会
疲まるるへ諸力と労せぞ。惣と集百俺仰飛く退く而と殿
んと計るの行るべし。汝等心と惑さるなと独幸と烈まし競
めて信孫言郎ふ答へくのふゆう。主家を滅亡あらば。岡
城まべ紀事もあらんが。久政長政孝命ゆ。退けとの指揮も
なれふ。何と従して幸惣まべん。歌の国会仰十万。ひまこのふをも
怖る事ぬ。出仕ものふ眼の活きうちハ退うんと思ひもうらぞと荒会
殺ちて罵りるにぞ。木下が勇士倫大ふ怒り。国無の猛威ぬせつけ
て。忽破微塵ふなるんと加藤福鴻。行柯姫尾傑亂盛んの壮士

軍。城下へ進るし。秀吉制止し。落び大野木ふうち對ひ汝も忠
義士とおりひしふ隠病木練の不義士なも。織田敬仁義と厚
ふして。撤奥ふ紀ぞ紀汝倫を助け還さんとおしめをふを
意ふ賞紀退城せざるん。倘當城と出もせば害せらまんうと
夫と怖ぬ吾む緯の隠病さよ。然とて此所ふ殺死せば徒死ふし
て浅井の為ふいひとつも益なし。這義と知らぬハ不忠不義
士と謂つべ。真の大丈夫の心さべ。歌偽りて攻圍むとも厭と跑
散らして通らんとこそおりふべるま国会歌と国会ありと他んぜば
迷ふ撃て発べきのけと。とづの城ふ引籠こ。のつまでも無事なら
んとおりふ愚魯さ。不詮汝ハ客話べらんだ。城中多く汝将幸倫
信長の仁心見まと家のこめとおりべ小谷へ退去いさべ。嗟

弓矢神も照覽あるべし。退去の途中を妨拒ゐど。鄙怯の挙動もるべからざる大野木一人の穏病神ゆゑ。諸人の笑過を招くことうたがひなし。と呼たる声ゆ諸兵倶ハ退去ゐさんと動揺めたる。然ども大野木ハ木下ゆ辱めらるゝを大ゆ瞋り。論ゆハ及ばざる儀なれども撃て出く混散しらるゝと。二百計の兵士を従へ奮発して沖出る。秀吉斬あらんと察しらるゆへ故意悪にゐしるが果して突叢ゆしらしを。勇士ゆ指揮して推捲散くゆ攻起しらべ。因茲ゆりと思の外。加藤福島の勇猛士怒氣を含めるが如ゆ一縱も當るべ。遂ゆ怯えを将卒ゆ麻苗ゆ電の亮る像く。晩くも孔軍ゆ殿もるべ。秀吉再び城ゆ向ひ怎麼ゆやいゆと呼たるもべ野村こ因村恐怖ゐし城を并ひて降参ゆ秀吉を形たち伯米遠へず。城兵一個も害せざしてゐる小谷へ帰さしめ木下ゆ諸勢こ千余人横山城ゆ投代りこの趣を信長へ云出せゆ。織田殿殊ゆ御感あり。當夜ハ姉川ゆ東壕ゆ宿陣あり。翌廿九日愈帰陣ゆ変せらるゝが木下ゆ稟たゞごとく。横山城ゆ將士を置んと。彼ゆ多番を撰ぶとの人ども。敵城小谷ゆ近ゆのこゝゆ越前街道ゆるゆ西へゆ尋常の倫比華ゆてゆ守りゆしと思めされ。誰をと當面もゐさるゆ姑く御思意あるゆ。秀吉ゆ外あるべゆ。彩や濃ゆ望ゆして城を取るも木下ゆまゝ濃ゆ守將を命ずべしこて頼て秀吉を御指遣縛を命出さるゝに藤吉郎義所倘小谷ゆ命ぜらるゝゆ長濱城と藤吉郎して守護つるまゝらんと稟をゆゞ信長大ゆ悦あり。汝

なかんづく彼城に籠るものは然りとおもへど難所なれバたやすくあらず
さるほどに偽りも氣の毒なりしが讃なさんと云神妙なりとぞあるべし
と宣せしかど尓藤吉郎謙辭し謝せしも御苦労煩あるべからずと尓其身上譲ば
これハ浅井家父子に囲窮なさしめ此のち攻易きやうに仕りたらん
と丈夫に兼諾稟しける。備又木下が勧めによりて磯野丹波守が
籠りける佐和山の壓守として。百々屋敷小城を築き丹羽五郎左
衛門を守将として。遠城に籠置。其外小谷尾末山の砦には市橋
九郎右衛門。南方佐和根山には水野下野守。西方彦根山には河尻
与兵衛を對して籠らせ。然して織田殿ハ援軍を引率なし。岐阜へ
御歸城ましましける。続く木下藤吉郎ハ自勢一千五百余騎に
て横山の城に楯籠る。備其手長濱并中竹中半兵衛を

城代とし。浅野弥兵衛を當副て是も同じく一千五百騎溯虎
営を守らしむ。然るほどに浅井備前守長政ハ今般姉川の合
戦にうち輸け自方の諸士多く戦死なし。朝倉勢さへ遠く越前
さして逃帰りしかバ大に勇氣を挫しき厥のミならず横山の城を
攻陥され敵の有となされし。甚鬱憤の事にたゆり取らんさん
とて幾遍か攻撃かさんとすといへども。守将ハ名に負秀吉なれバ。
進て却て損するのミにて。攻陥す期なりしかバ是非なくその侭
捨置たるに木下郎却て不意に撃発小谷を急に散々に乱妨
放火して敵を怖し。飄然として退收こと遭々なりし。しかれども
浅井勢。忿怒を發して攻れども。備へと雖も羅に及バず。それ
家にまる。四國にありける三好の一族。去年本國寺に敗北して。

三好の一族
再度
出張しく
野田福島ゑ
若ぞ結構も

切歯くなりといへども爲ぶる術もあらざりしかバ時節を見合せ居たりさるが淺井朝倉信長と合戦に及ぶと聞時こそ宜なれとて三人衆攻よするべき評議しけるに三好日向守稟しけるハ再發の軍に利あらしなひ遠く四國へ註復すること縱令勝ぶる利ありといふとも是を拋事能ざるべし如かず摂州の地利に據て安憑なる砦を構へ志まに瀬守て京都を窺ひ或ハ進み或ハ退き機を試て軍をゆるものならバ多くハ自軍の利とならん將また石山の本願寺ハ兼て信長と不快なれバ渠を語らひ兵糧等の助力をもたのまん事を又云ことハ謂べからず今我倫輩蜂起せバ淺井朝倉が勢威も益強くなりぬべし織田一方の勢をもつて四方を制する事能ずて困窮せん事必定ならん今その砦を築くべき要害なる地を考ふるに摂州

今俗市本に比田のまゝ三津門とあれども今ハ安治門の流ありて淀門の下流に基づく既るに昔日天正の比ハ木津門の事なり依て木津門とも

野田村福嶋ハ沼多くして馬の進退自由ならず南ハ木津川を帯び背方ハ海に連綿たれバ四國の通路心の随なり彼所に砦を築成し俺們蒋び出軍せバ信長定て推進来らん厥を假に引受く防戦數日を送るうちに淺井朝倉へ諜じ合せ挟んで信長を撃たれハ勝利を得んこと易かるべしと理責て説ければ皆この議に同じけれバ同年七月廿七日一萬三千有余人野田福嶋に出張して要害の砦を丈夫に構石山本願寺へも使遣し自軍の兼て兵送るにまで兵糧を授助せられぬ是によりて三好の倫輩勢威強大なりけりと畿内の騒動大方ならず遥く岐阜へ注進しければ信長これを聞しめし遠路こそあれ三好の奴輩根を断枝葉を枯し盡さん早く摂州發向せよとて陣觸ありけるに

濃尾張伊勢近江こ河の軍兵。都合こ万五千余騎。同八月廿日の発朝。濃州岐阜を進発あり。直地小上洛ましくて。將軍家小謁しこ多ひこ好誅伐の事を言はし。公方家小を所後より。所出馬ましくしへと信長直小揖別へ発向あり。程もなく公方家小も所出馬ありて。揖別中島へ下向あり。こ好と合戦小及び。こ多這晌石山本願寺より。淺井朽倉の両家へ使節し。内々こ這晌石山本願寺より。淺井朽倉の両家へ使節し。内誅こと。ちあし遣はしる。是い補正異の計畧なり。頓て淺井長政も信長大坂へ出馬と所。よ比晌なまべ這方よりも。軍馬を発して都へより。將軍および信長を。挟撃小攻べしとおりふ機會こ石山より。内誅を告来しこ。いよく歓び聲力を得く。早速越前へ使を遣はし。こ好蜂起の事小つ比。敵小際なる比機會なまべ。淺井朽倉一隊小ふり。直地小京都へ攻上り。信長の帰路を酸めなふべ必定猶利こ。べきあひご。早く所出馬こ。と頻小催促しこる。朝倉義景評議しこる小京境進出。這義もつとも至極なる。迷小出馬あるべしと山崎兵庫助法とも小勧めるふよう義景小も。弱こ。べ準備をべしこて。長政の方へ諾答なしまづ先陣を操出さんこて。朽倉式部卿亟景境を大將こし。兵庫助備前守山城長門守ら俄一万余人。朝倉中務少輔景順。阿波賀こ帝前波孫右衛門ら俄。こまを二陣こして。主勢同ドく一万余人。同九月十日一こふ谷を進発を。備まこ淺井長政ハ朝倉義景のよしを所若居とも小歓び號こ。即地小出馬を調へく。四千余人をこ隊と。十四日小小谷を出馬し。坂本辺宿小着陣を十五日小朽

倉勢浅井と一隙ありつるゆへ。勢威まさく洪大なるゆへ比叡山の僧徒倶に元来朝倉と親しきゆへ。今般南家の出陣を歎び奔走して将佐とみることまぎらめ軍威いよく莫當きべ京都の貴賤おもひ恐怖し上を下へと騒動しけり

宇佐山軍信治可成戦死 叡山対陣

疾疫猖獗起る晌ハ稍五畿ハ頻まもと比叡山ハ織田の歎ある。浅井小豊りて諸方小及ぶ。当国宇佐山の城ハ信長の舎弟織田九郎信治小森三左衛門可成を副らまし。且また森ヶ部将ハ青地駿河守武藤ハ帝右衛門ハ柴田玄蕃同彦右衛門ハ佐藤宇佐山の城へ遣されんと模別より遣さまるる小聚も浅井倶坂本小出張し。加勢朝倉京境同累恒と評定して

まつ宇佐山を攻落さんと狡策をもつて把ませる小森三左衛門撃て発賛く小次捲り。幾多殿捷く退入るゆへ。殊ハ遠く遁返り。城ハもつとも別雪ありと戦要ハ苦るゆゑ。急ハ両家の勢をもつて攻陥さんとその翌日浅井備前守長政三千余騎ハ北国海の濱より推進まべ。朽木勢ハ三千余人河野村より地蔵峠の二手の岳をもつて。対峙守る宇佐山城ハ九千餘騎ハ攻んと計るゆへ及ぶべくもなく可成尋ねもとりんと再び進る歎を撃んと森ハ三ヶ一千余騎を率し。宇佐の街小出張し。五百を路の左右小伏置る院あまを取るゆゑ鳴号を。ろぐと諜合せ三百北勢をもつて。街口を離まして備部より待小猛ハく汐戦の為軍雲霞社像く推進しゆへ森ヶ後ハ要小

相遠し。彼大軍を引受ゆるがしふ。思ひの外よと猶豫の態なりこと第つも本好ふ違へと武功勇猛の士なりしゆえ屈せざる自軍を懲ましし敵の惑るを待支る。朝倉勢こまを見て森が小勢とをびるく侮り先陣系境ら軍を單。自他ともふ魁を爭ひ只一揉ふと攻着るを可成如く遮戰ひつまり輪て退ぞけばのれひ稠ぞる朝倉勢單携急ふ推新来り著へふせんと進ることを可成二ど殺て返し。戰ふ〳〵走りるを敵を引くく猶ふ嗜号の際まで引著らる。森こと右系つ時をかはしと嗜号の一跑を合せるまで右の伏勢一度ふ発り雨行係くふ流敵を惑滅を吐とつらしむふ隊伍を乱して退惑こる。殺倉勢不意をうるを西ふ傾び東ふ倒る。散乱ゆ〳〵る色を霧ひをく拒逆せと可成が一声活く呼ばりて。ぢうう一番ふ戦く返し。

長棟の陰を霹靂世樹ふ佐像くふ。実起くく激殺をまびこと右系つ後佐の部堂道家清十郎。同助十郎。尾藤源内同又八郎。貪究系の勇士達を人ふ劣らぬ捉く返し。倭僧の敵を繼く破北ふ棚伏く。悪とも後せぬ攻着るまば未練ふ崩まじ朝倉勢散くふ分りて敗走を。森が主従一烈ふ奥斗を駆惑く敵を殿こと無數を遇淺井長政こまを見て。敵佐寄を也是迄ら。ん強を也もつて推逆さば。城を取らんこと易ろうんとりふと景境も環りとして系恒が強を也を當向ろう。森可成ハ旁倭既ふ朝倉一隊を破ることハ。敵を大軍のうるれば強兵の東らん事を察し退逆さんとをる系備へ中勢ふ備系恒山陰長門ふ古家魚住備前ち景周倫こ千余騎陳殿もあらせぬ退来るに可成主従相ト

宇佐山の
合戰る
森可成
歐死る

風虎の亮原と走るが儕く。勇猛活く戰ひるを武勇功者の淺井
長政。こと千余騎ゐて左ゐ開きさ森が隊伍の横際より。一団ゐ滝と
投りるゐぞ戰労迄し城兵們両隊の大敵志の死ぐさく。隊伍倦くゐ
見へる所を。長政京恒得るひと諸將を勵まし揉起さく。突崗
さんと美く地ゆどに。寡兵の多勢ゐ敵ゐ戰屈して敗走を可
成固く踏止り。彼等們を退せんと老臺數十騎前後ゐ後へ敵
の大勢をう受くゐ又怒を散して陽死戰ふこをゐよりて敵兵も
果多殿投瘢を負せこをど自兵もあまさ戰没してこた事つも
多く傷死傅たぬなどらも血戰をるうち諸軍大半城中へ入を
べ可成方僅ハ意寡しと採退ゐ死退死城門近くゐる程ゐ
敵退来ること大急ゐ。彼ハ暑投ゐせらるべし。遠大軍を引

うけて助るべしといおうそをを五吾遠場ゐして戰死せべそを除ゐを
城中の分機さびしく。陽潔の備金して宮曷暑城とあとと
當を彼しのそを城中へ使兵を走らせ蜜く保道を嚴重ゐ備
敵を陽くの準備し玉へ五吾ハ遠場ゐて敵士を裏へ殿死すべし
と稟送り。部等殿軍五百余騎ゐて退来る敵の心中を動揺へと
して沖て投東西ゐ殺起南北ゐ馳投余ゐ撫念の心を後殿彼
を抜ゐる帰をべこを。千萬万代の戰ひ中ゐも大將可成ハ敵兵
数十騎部地ゐ掛付ゐ多ゐ小瘢を負せこを分も数箇所の疵
とうけ黒糸威ゐ紅ゐ深愛陰打馬ゐ斃をられべ方後ハこを
ゐでなりりと敵を四方へ退散しく迷く遣ぬべ捨く後十人
字ゐ斬迫し。死しこりるを森が老臺尾藤源内同又部道

家清十郎同助十郎倆之人の戰死ハ殉死なべしと我もくと歌中ハ紅投おのゝの素ハ樺果せゝる亂軍ハ戰死ゝゝ森と左馬つゞ今天の烈戰後ハ織田家の勇士かどありて諸人の耳目を惑ひし遂ハ城を敵ハ奪ハ棄てゝ去ぬ信長將軍の朝之んぞして半途ハ冥府の鬼とおりしハ最惜むべく勇士なり何成行年四十八歳也遠時城中ハ織田九郎信治武藤五郎右馬つ青地彌左衛門河内紀田玄蕃允倆迫来る自害を助害左右のうちハ森可成使を送りて城中堅固ハ守るべしこゝ左馬つハ敵を拒撓戰死なりと告らしかば信治大ハ悔嘆き森を戰死なさせてハ我まゝ舍兄信長ハ再會をべく面目なしと城を打出救ふべしと雪氣烈しく猶出ぬを武藤五郎右馬つを遮り命せハ理至極なり。

△森可成の八幡宮の六男也稚兒者長政の子孫にて武法の行人紙續き右設日蓮子なり

今倘撃出ハ敵ひかべ者て敵ハ著投せゝれんこと左馬つが切なる心も城を大事と思ふてなり只可成ハ教ハ隨ひ城を出ぬを玉へと所ゝ九郎信治其方ハ詞も無事なゝ森ハ織田家股肱の臣なり服部ハ戰死ゝと所なゝ救ひハ出ぬの臆病なゝ怯忠臣と見殺ハ出ぬし謂まん事武士の第一恥べく義なり縱令城を殘せべとて信長なんぞ敵ぶべく渠毀損せべ我もまゝ活殘るべき道やいとて紅出さんとせゝもしゝべ青地彌左衛門河内も馬辭出し小臣も無こそ者出ぬるなと信治ハ從ふく心ざや可成を助けんと至後ゝ三百余騎武藤が諫めをもとしも用ひ之義氣淡石の像くハしゝ墓地ハ紅出ぬるゝ（五郎左衛門も力なく當城ハ警ぬしと殘を制止め城門を鎖固め心強くも撃登ぬ防禦ハの備をなしハ九郎

信長者地と偖小。二百余騎と惡雜小備へ。渦巻敵中へ冲指り
るるに。爲き可成戰死せ〜後のまぶ。信長大小悲〜き歎き。新て
も頼く覺悟の者ども。ともも同く秋小殿死せんと。當るを驍便
小攻く。蹴迫極死狂小戰ふ。逆小戰死せられる。緣河守も
道を抜ぬ。と死地を隔て。を斬死そ。ともをさめ小淺井新九郎
両家の名士戰死。瀧勇義ふるふ。小累をしられど。遠圍をさぐ
城と取らんと。郡地小推寄こを二ッをこ小。唯一揉小と攻起る。城小を
武藤肥田の門〜。よく防戰を〜るるよう。弱る氣色もなりしうば。
一端小攻隔さを。東端の揆を得て長政京恒張勢いを
纏め坂本の陣へ退迯〜。宮信山小の殿を殿〜置。四日大津
の近邊を。放火〜て軍威をあめ〜。近日京都へ攻上らんと。
を收揆列へ所へ。されば。信長今い此地小五陣ありし。敵を京都
へ入まじ。とまじ。横山へ使を。を遣く。木下秀吉を。信長ら。攻陣
の諸海〜。ふ小藤吉郎奇計をうち。九月廿二日小信長揆勢中
寫を。衝裏。途中。遊殿小出ること好を。散〜小敗北。を。揆正
眞が指揮小。周て。撃て。發る。石山門徒も。木下が爲小。敗殿を。將軍家
小も。織田勢小。道中。を。雜小。陣。滝せられを。信長少小。鳥銅の。を。ように
を。地小。大津の。方へ。推通〜。坂本へ。向へ。を。王ひる。信長こ好石山と。特別。なりて
の合戰小。石山軍。紀小と。要〜
偖。ものこと。好の。倫軍小。遊殿の軍。微撰〜。ることも。猶。懲を。及小
辨。宮〜。て。今。信長小。坂本小。於て。淺井。淺倉。と。對陣。をなを。遊際
小。京都へ。攻登う。將軍。家を。警〜。
小。周て。信長。揆列。衝陣。の。時。伊丹。名。庫。頭。池田。荒後。を。淀。木

佐渡守義丞信濃守堀川伯耆守に依。都て當國の諸將を召き。後般の事條御特あり旦そこと好右京亮義繼畠山次郎宮政高人を。河内の國若江高屋の城に立くこと好依都へ攻登ら。び背語を斷ぐ元事を謀され手勢を見せるを四へこと好依勿々攻進ら事あること。宋へ獨神に魅らまてる芸軍なまで。

うく帰國の準備を。十河篠原東條安宅次第くに四國を當く帰帆しるに人衆も力及ぬ甲斐なくも。野田福島の陣を拂ひ。三日四國へと帰りしなどに何時こへに接別慌韓信ふこそあり。然るに信長に攝列より翻ず條く。坂本に出し進しぶ淺井朝倉大に驚き。信長彩まで速地に退去とと思も捜らまで。從今帰陣に及ぶとも。こと好の軍勝うしろより遮殿

たべき筋なまべ容易退くこと能し。とおもふに違つる今久いまぐ。九月廿二日の夕方を疾きこと羽翼を用て飛るとも怪しむべきの。このこのうたで。隊伍の整くこる緯い威勢猛火に比べして。殊

勝とも頼を不見なまべその鋒鋩に當らじと恐怖まく事大

方なくて。慌忙き両家の兵軍。比叡山へ馳登り。陣を嶺峰に

張る山を小陣を構へ陽際の隊伍をかしこうこそ信長淺井朝倉

が恐怖の態を御覧ありて。然こそ申めと脱笑せらまを。曉まべ九月

廿四日比叡山に攀を圍を。諸將へ徇く隠く小陣部を命屬らら。

まづ番頭郎小叡山の麓要塞を構置平手監物長谷川丹波守

山田三左衛門不破河内守九鬼左馬頭丹羽源六郎。水野小大膳

依を。稠を穴を村の屬城に。佐久間右衛門尉津田東市正

佐久間藏助。塚本内藤。明智十兵衛。苗木久兵衛。進藤山城。後藤
孫左衛門。梶原平次郎。多賀新右衛門。木野雅樂。頼信孫八郎
来つ中條將監。依田右衛門。田中村少輔。柴田修理進氏家道卜全。
安藤伊賀。稲葉伊豫。唐澤山城。津田左衛門。山岡
對馬。佐治八郎。蜂屋兵庫頭。敵山の麓なる古城の遺を再び構へく。
津田二郎五郎。香西越後。外公家衆を將加へて逆徒城小
籠城せらる。備後長の御本陣。志賀の城小定められ逆徒綿て字
佐山小陣列せらる。公方家小も如何なく二条を御出馬ありて東山
將軍塚小御陣ある。是等を集せく總勢都合三萬五千有余
人。猛威山江小纏きて怎藝なる淺井朝倉も敵對べくとの
見へざりける

秀吉說兼須臾諸面一撰屬堅田合戰

群蟻よく蝸牛を攫小ありとして悔るべくぞと頼て石山小勢
居せる。摘正員が密謀りして。勢列江列の百姓輩諸石を蜂起
なりとて大方ならぬ怒とも敵山小大敵あるべ是等の小事小開り
得ぞ一應淺井勢を攻潰さんと評議して一百日ぞ之を内。
越前小ありける朝倉義景。二万余騎小て進發已江列江
地小是陣して上坂す。信長。堀琴。苗鹿の四五村小陣取て列
連。その威勢浩大小して。天魔も避る和見ありこまさへ大軍なりける
へ小山門の衆徒一味して。比叡十萬余なりとも敵山の
要害小險阻を拠て隊部しべ信長勇猛なりと雖ども容易小
攻ること能ぞ怒とて八又淺井朝倉好て軍も發さるべ左右

なく許揮もなりがたく。徒勢小日を送り居る。這度小牧じて江勢
西国の一揆蜂諸石の小城を乱暴する中小能て尾州勢加の
境なる長宮門徒們数万人一揆を起し。終動さ形ぐら 彼
行の係り。これかよりて勢州の守護人滝川左近将監、蒙慶
是を制をとめども更小慎まず乱を知らぞ且まず江州の一揆蜂八佐々
木兼頼が指揮小して公武を好む御民們織田家の当城を攻ること
孔方狼藉ゆも嘶色し。茲小丹羽五郎左衛門長秀を百こ名義の器小左
て佐和山の城公をうしを頼くより謀略を遣らし。佐和山の守将儀
野丹波守小嘱く降参の事を勧め。利解をもりて称しる小ぞ遠来
る丹波守も稍帰仕の色いなく為丹羽が方へ使者をもりて
信を通じ。降参ハせぞといへども熟慰の降といりぬ然るに這遣

大将信長小坂本小着陣と所よりも。彼る時節ハ一人小もあき。
弛加ゝるべ便宜ならんと老賢江を所右衛門小遣を守ふせ。五
百余人を率従へ坂本へ行人と歩叢小一揆蜂治次を遣り
嫌らを丹羽長秀勇公五百を烈しく歩こを大小戦ひ居るなどに。
敵を殺こと数を知ぞ。然ども敵の一揆ハ四方八面より
涌少如く。強公ハ勢を弱交く。暑纏ゝる小長秀も無手滝
てぞ見へ居る雲へ横山城ハ留守。竹中半兵衛重治一揆を制せ
んと五六百の勢を率して打出るを丹羽長秀一揆と戦ふと所よりも
異風の係り小弛進て一揆蜂ハ背後より。金釋もなさぞ掛起る
小ぞ一揆蜂驚慌し。敗北一ゝ為と長秀欲び重治小附ゝられば
竹中丹羽ふうち佐ひ宮めく坂本へ御出なるべ。跡ハ小文小任され

そやく彼所へ越さんと勧めらるる色々五郎左衛門。然バ所詮時ハ今こそ
是こそ自勝を率昊ー坂本の方へ急ぎ西く行中ハ一揆輩と遮
散ー。意静ハ横山の城ハ入ハ久を丹羽長秀ハ坂本ハ到り始終
の疲蹟を云ハー。一揆輩ハ織田信長その
功と感ト思ひ然ハ遠ハ無ハ一揆の緒ハ蜂起ー之騒動なきー。茶湯
懐の玉ハ之ハ制を云ハ。新ハ城いあ玉ハ時。木下進ぜ云状を西うこれ
御氏の蜂起ハ怖ハ思ハ思ハ民ハ人ども制せ云ん人ハ一端枝葉
の蔓ハ之ハ。根を折割する時ハ力を労せ云ハ人ども忽ち静謐仕ら人ハ
不形ハ之ハ三寸の舌戦奮ハ之ハ諸ハの一揆を疎中さん今歌陣を歌ハ
参ハ軍ハ遣ハ遣ハ方便を移ハ人と磨ハ再奉ハ之ハ信長
大ハ悦び給ひ快討ら人と命を下るなどハ木下秀吉弥御準備を

白ー。従兵五指余人を率列坂本を起ち途を急ぎ石部の城
ハ入ハ之ハ。佐久木兼須ハ安内せし人ハ後を軍を止めハ
秀吉一個を城内ハ宿ハ木下直ハ本丸ハ通ハ義弼ハ入ハ
兼須ハ対面ハ茶ハ出ー。草ハ義弼ハ対ひ一
別以来疎遠の況軍事ハ眼ハ見ハ面ハ涙ハ眼ハ
参ー之を先年小谷当館の恩情を被ひこと。況時も忘れ
らせそ。報恩を思ふとの人ハも君ハ仕ハ任せ
今日参ハ上ハ人ハ義も御無事の恩澤を報ぜん端をもらんハ
却ト人の義ハ人と事ハ事ハ義弼所ハ吾ハ変りやすきハ人ハ
対面をさし緯を恨ハ説ハ人ハ足ハ武名も尚国ハ藏ハ
仁義の行ハを暗所傳ハ。陰ハ人ハ悦ハ今日ハ人ハ集ハ怠ハ

なる事ぞ。所詮やと訊ぬるに。秀吉落び言發るやう。遠義と
入道殿へ言出せらるゝ。御得心あるか於くハ遍互の疎便より去
ぬる永禄十一年の秋公方家御上洛ましまそ機會ゝ信長使
節を遣らるゝ。要授らる一條を。御業語なれかゝりて。止むことを
得ず公方様さめ。合戰の事か暨ふとゝ。(ども)微も私の義か非ぞ。
將軍上洛の道路ゝか閑けりふさゝ。直ーゝそ。御両所(義稙・義澄)當城か
ましませども。遠方より敵せ事ぞ。此義をりて疎意なれを明
か知ーめらるべ。然るを猶も遺恨か為なれ。御敵向てせゝ為ハ事
道なれやうか存まゝらゝを故如何のとなるを謂ふこ好ハ公方家の
怨敵かーて。天下の諸侯のゝを不ても是を悪まぬ族輩もなし然る
か當家ハ將軍かも頼怙ある方と思ふ。一遍御身を據らるひーを

ひてこ好か一味ありしハゝ道の輩動かいましまさゝや今ハ更くこ好
荷擔の由ハあるほし當國を素ぶ像く佐く未領か牧返さん。
むぶしめーふて軍馬を發ーゝるふらん其ハ一應ハ理ながら。信長
私欲の押領なるゝ。公方様命を蒙りて。當國の動乱を治めんのゝ
なり。入道殿かも先非を悔公方家か御將佐まふ。信長か力
を勵せられ忠勤を竭ーて忽ち退日ゝを素ぶ如く江列の大
ちゝじむべ。勲か有せんとーて。公方へ敬せる不義ゝの名あり。
誰ゝか是をよしとなもべき。驕力を貴ー名士を困しめ不忠不義の
名を有くゝもそ社甲斐なれか乃びて家祖へも面目なるべ。和禎
御父子信長と御和睦ゝ。まさば悦喜這と為べ。ゝゝ。こを察情
しゝるふて御家の長久を量料ゝるゝ為全なんぬと謂ふ。利解か

六角美禎
過非と覺しと
使節を
もつて
公方
家へ
解失を
稟せ

明小說若々ふぞ了得の六角義賢も後腑を貫刺て偽く思ち
茶悟〳〵心を草め藤吉郎小敬禮して誠小足下の教なくんば
吾年来の迷雲晴はじ。憂喜しゃ今日只今。虚假の心を打棄
く。實意小公方家へ随逐せん。信長公ても肩尾よろく。拙者
と悟ゝまゝゝると隱懃をつくして悪しゝるふぞ。秀吉大小歓
悦ゝ。拙き小子が詞を容られ。早迷の御義諾へ使者の面目
目かまると國家の大幸と也小過ぎ。愈その御所存あらば早々
取〳〵計百姓倆へ其儀をよく徇させられ。御使者をもつて公方
家へも言ふ〳〵と勧め置ぞつ信長小悪所せ安途のさせ
悪さんとて本下へ坂本へ立帰り。斯く計次第を云ふ。近き小侍
本の使者来らん猶又一撰も乎漢なさんと待小復なく義演計

報使として老臣二人伊藤吉こと雲新左衛門人を遣れし。献上物
と種々調辯公方家へ御禮悪上んと坂本の御陣小到。信
長へ恐縮恭むべしと。隱懃小云上〳〵れば。信長小も御満足の
態ふて直地小公方家へ承諾なさせ義演父子御將侍の趣
を云ふ〳〵。御態は命を被りて再ぶ坂本小立帰り。信長へ
御報復を悪上別辯を尽て為人い石新の城小帰ぶ。公方
の寵意信長の命令を詳小演るふぞ義演ぶ来悦せられ。
早迷國中小徇出〳〵。佐々木一統公方小随順〳〵。信長と和睦
なるべしと。一撰休〳〵ことなるべし。判止〳〵れば汪別一撰を皆
佐々木の領民なるべ恩地強動演治〳〵。蔣び就坊の岩
なるべし信長殊小大悦あり。大小木下を感賞せられぬ琉小一撰

の發動ハ静謐に及ぶといへども。浅井朝倉との對陣ハいつを限と
定めもなければ合戦もせず徒く日を送り月を過ぬるに次
第に寒氣は時節となりければ兩陣の對陣諸卒を労苦させ
せんより一日と定めて有無の一戦を決せんやと謂送るといへども
浅井朝倉ハもとより謀て織田勢屈して退く所を追撃せんと巧
縢なれバ返答もせず日を送る。信長今ハ詮方なく。對陣の徒然
に往来自由をなさんとて。瀬田に舟橋を掛させられ。橋の警固を達
られて植原新右衛門村井新四郎を當番たる右に月日推移り。
九月より十一月まで一箭一矢も動かさで對陣とのみなしけるも織田
家の侍士們屈し困じて寒氣が中にも比叡嵐に冒さるることの
甚しければ怠るとはなけれども自然と陣々嚴ならず。信長

志まを憂ひ給ふて自から諸陣を巡撿せられ或ハ慰労或ハ制
止し。敵に退屈の氣色を見せる事なかれと御下知濃かなりしかど
ども諸卒もとくの輩們ハ朔風霜氣に犯ひ悩ミて案義に千萬
不見へたり。茲に堅田の住人猪飼甚助馬場孫四郎居初又
次郎などいふ者あり。之竊に地に謀合せ信長の御旗下と成
御陣へ参りて言状ければ御感少く信長さらバ陸の嚮導ぞ余
つかまつり越前より。諸般運送の路を捉断奉公の忠勤に
備へ奉らんと願ひしかバ信長これを聞しめし徒然の機会の何
とぞなと思ひ給ふ事なれバ穏便として誰その遣らんと擇せ
玉ふを坂井右近政尚進み出。堅田へ殊に勢不なれバ諸将も
多くハ進まれまじ万一仕損じぬる時ハ自軍の威勢を折く理也。

坂井
政尚
夜中ゐ
堅田浦を
襲ふ

然りしへども猪飼傳二人を召寄せられなば。
聚向て才を矜ふまでも忠義を竭し尽さんかと望めば信長
感悦せらるる所時に右近へ命ぜらるる。御同代官に織田甲
斐守を遣はさるる。彼は一千余人別に佐藤の名とありて。
遠江五百有余人頃は十月廿五日。月みき夜来に坂本浦より出
帆なり。堅田浦に着なり。猪飼馬場傳を案内者として。
淺井朝倉が兵粮を貯へる。堅田寺へ推進せ給ふ。援
四角八面に羅遶せば。敵兵ども
ひし事なへ坂井が勇兵に新起られ慌忙き逃散ぬ。右近は尚
軍勢を引き敵の兵糧を自兵に不食
ひ。諸卒に是を領脱この旨を坂本へ注進せ

賞を揚く悦ばせられ。坂井が武功を感賞せられ。義景長政の
両将は自軍の兵糧を敵に奪ふを。制堅田も敵地となれば
小谷越前の通路を塞ぐを。往来自由なるを。君臣共に
こを憂ひいろく評議なるを。淺井長政軍事に長ける大将
なれば。朝倉に諸将に若く謂せう。堅田へ加勢の来ぬうち敵
の疲れ際を隙便に自軍多勢をもって堅田へ推進せ敵兵巣を
殺捕らんに。猪利を得ぞといふことなるべ。各いふと雖ども
朝倉式部卿。山崎長門守傳。這義奇計に成りて先陣を
願請なるべ。義景もこを同じ。朝倉宗滴中村豊を物傳と大
将こしてこ千余人を先陣らしめ。後陣は淺井の勇将なる赤尾
美作守。同助兵衛。田邑平内。淺井新九郎。大野木又八郎。傳二千余

坂井右近
堅田浦ゟ
淺井朝倉ゟ
兵粮を
奪ふ

人ゝ。六日の巳の刻下剋。堅田寺へ推進る。然る小坂井政尚ら軍
事小熟なる勇將なれば。敵ら八寺内を騎廻し。妻子ども泄邸
なく。代ゝ諸士を懲まし。兵糧を飽まで食ひ。燒失ハ燦こと樓連く。
寒氣も忘るゝ程なし。外の侍小も斬て奪んと。氣力強勇小侍ら
石ハ淺井朝倉の五千余騎。前後を達く推寄る。敵ら奮撓ち
列ね。こを躰小攻援らんと。ゝ。坂井政尚を。しも。騎ゞ十分撓氣
を奪ふる。逞兵を率ひ擊て出朝倉勢を迫へられば。我前の先陣
二千余騎。敵ら闘斷とおもひの外。速疾小擊出るゝ。彼て不意を
殿を。如く。先陣俊く小ゆるを。老練の坂井右近政尚自軍を指揮
して斬起る。単騎急小退却り。迷疾小斬て出るゝ小退揚て寺
門を固めゝ勅ゝ。外兵勢安小相違。大小敗らるるといへども。

大勢なれば猶怖まず。淺井勢と一隊なれ。再戰なさんと後陣
の勢ら。来る方僅やと。後向ゝ
坂井政尚戰死豐臣田浦屬秀吉軍謀
劫小壞滅ゝるとゝ。逞小是を義とせ。天地ゝら怪生死
あり。別や人小於ゝ。を。然ば坂井右を政尚ハ戰小敗と。
し。神速を。る中へ退を。諸軍小急を。体ゝ。ゝ。
一隊小朱て。寺の四方を。推捕圍。無辨小強援らんと。
然ゝ朝倉勢ハ。を。孤摩を。
ゝ。強軍ん。を。地葬る。坂井ハ一千余騎を二隊小分ち。
ゝ。逢と。陽戰ひ。彩骨碎身ゝ。
ゝ。弾更。敵を大勢小。安寧ゝ。

遠隔形隔より。素振んとなく〻る小ぞ。右近ハこれ双の猛勇少て。軍慮小賢ハ将士なまこバ自己一生涯の聳名奮揚せんと決心さるその不謂い今年の長姉川也。先陣を敵小斬崩さ也。それさへ世厚とおもふ所小又りや自亂久義を彼合戦小戦死さ也悲歎小堪ず。偖小死なんと欲せ〻ら也。老臣の練小よりてそ物死ハ止まりなまども殊より愛〻一子を失ひ世小頼憑なきこと小思ひ且ハ隱病の名を受て尋常小死せん事ハ拓憾くいハ小も諸人の目を羨うそなどの勇戦ハ戦死せんものと頼くより懷立さり機会なまバ遠遣の軍役敵危なりと知るべ。好望て乗り事なるなへ。際緩防戦撤離なり。と千騎が中より傑氣の郎等を三百計猛り出〻一門と衝く突撃ハ。大勢ハ敵の正中へ吐と奥て猛り

撥右右と撥起前後を跑散。彼の像く偉ハ像く。紛れ也ども得ハく面向敵ハ勇小信せく。斬倒〻撥蕩〻死懐と裝〻て戦ハバ右右と相依帝葬小ハ坂井十助。浦野源八。同源二郎ハどの小一騎當千なる倫輩。皇人なる者らぞ血戦なすそ好相同なるバ。吾孫大将右近と敵ハ同じと勇氣と懋ま揮きハバ敵ハ大勢なりとハ〻ども。遂小坂井俗小斬頼され孔起てぞ見〻ハ。朝倉景鏡。山崎。赤尾憤激なして諸卒を励ま。強ハ敵を奪て屠轉く〻刃怒と裝〻て戦ふ。坂井方ハ小勝なり。殊小敵前の軍小殺ま敵中ハ。ハも寡もせぞ。尋常の兵士なバ。斬る大敵と對抗く。行時も堪ぬべき事なるぬど。右近ハ家質とうけなる諸軍士ハ。大将改尚を。死を改しなる猛氣なれバ前小猛ハ敵

徒なく後に退くべき怯懦心あらで驍勇悍武烈火の如く激波に等しく戰ふれど浅井 郡倉の名士輩駆る事矢数を重ぬ弦ども落び砕輪に西日あらじと死生を論ぜ撃合砕あひたる後に朝倉方に塙平右衛門馬場孫二郎と戰ひ遂に両人縛番ひ猪股なくて死ぬるの武士中村宝助郡倉の名士 浦野源八郎坂井の老臣 と捉え合両人共に戰死を赤尾勘助浅井の家臣 も瀧に負て退くべと見しを猪岡惣助 猪股 赤尾を蹴倒し左右なく首を砕落す。

主外浅井の老臣に浅井新九郎田屋内大野木又八郎 倶 らの孔軍に戰死られば赤尾兵部 張 いよく憤怒の勇を顯し。

多く郡自士に戰死させ。なに西日に退くべきやと三づから西魁に馬を進め諸卒を指揮して攻起る。郡倉山城 若波 倶も勇と奮ひて戰ひしべ得に猪股 坂井 ダ名士 倶 大半 蓋に討死して。

残る名士も悉く瘡を負ざるはなしなり。右近も二ケ所疵を蒙り。

面に鮮血流灌く。動揺自由をならざれども人も勇気を減さず砕起きりて命ぐり根ぎり。四角八面に弦拂り怒突憤戰評 猪 を進敵を一個も多く馬を避て通し行て右近のよく氣を奈ひ。

蹈に掛横に擲り半時をうり血戰をるるも果多の敵を殺捉こべ去身も馬も疲るるぞ。敵を四方に蹴散し一息継ぐ去る而て郡倉 若波 勇士 若波 藤右衛門 最 ら坂井一個に自軍の名士を近散さを敗走をるを心に怒り一猪撃の猪頭をせんと馬を跳せく馳来り。朝倉家の勇 若波藤右衛門 李春 こ名をせんと声うるべ。坂井 改尚 眈と見く。鞭を兼に血を深る大力を捉り

坂井右近
勇猶餘り
前波藤右
衛門を
殺す

懸し。立迯ふて莞爾と笑ひ宜くも敵ふ對まるまろう。濃尾小牧く織田信雄小老功者まりと紛るまろう坂井右近政尚ゆう對敵いさらふ嫌なしと謂も果さで擊て蒐る若波遽小く起向ひ他更もせぞ稍半晌荒跳龍飛の術と謂し。千時美濃して闘ひるが加何ーけん孫右衛門右近ゆ擊投右刀徒と。拂拭して持る孫と潮血道長く折まろう。若波ゆ小手と撫る。徒せもらてぞ政尚が。徼塵小ゆまと殺る小ぞ。孫右衛門避る小際ゆ。亮とのけ小勝面と。血煙らて。次第ろう。両眼忽地血小瞑して。恐尺と視ること弱しと。の人ぞも勇猛と双の若波ゆまと。臂摑小細著ろう。右とも右刀と拋棄て。咲とぞ四腕と合せ。揉合拖合ゆ。るが遂小ゆ馬が陳際小落。孫右衛門ゆ痛癪とひ。膂力弱して細布ま右と小首と捉まろう。政尚も別ち小心神勞果。搖振やとく自由ならず。四方と尺ゆ小自軍も悉く殺死。敵小ゆ。ゆとく稠進る小進も再戰ゆ。ゆまじ殺辛の子小蒐らんゆ小潔く自害せんと馬上ゆ儘小腹搔切墜もゆ。ぞ小死ぞろう。續ひて同代織田甲斐守坂井十助浦野源兵衛と。敵中へ強投かゆ。好分戰ろう。華々しくぞ戰死る。遠藤岡涛の所加勢小。堅田浦小合戰ゆ。と所よりも。接小ゆて純著ろう。小坂井政尚ゆ。殿小戰死ゆ。ろう後ゆまび切く殘兵と助ゆぞゆと。猛猛ろう敵中へ。無二ゆ。ゆまと小突投ゆ。右横方徒小。次第自軍ゆ勇士。森原平兵衛。安藤右衛門尉。猪飼甚助。倫と。ひ出ー戰死せんと激思ろう。と練制して。殘兵。軍の三百計斬殘れーと。苦小助く。敵中と強出。續くして退ろうまび。敵もゆまと。

て逐たゞ。猶減ぜずして寺中ゟ退散し歟はゞ歟はゞ。
頓て大史ゟ捜成ち公と歳多間を負敵山へ帰りる。今日ぞ
の合戦ゟ淺井新介長盛家の名士八百余人殺さるゝが坂井ゟ属
せ〜織田勢も五百余人を戦死させり。御加勢遅れて遠国を棄
深らきるゝよう。信長ふく歳息〜ひまゞ御加勢の退道ゟ自
軍を助け〜功を賞して色〜ゟ褒賞せらるゝ。然ゟても坂井右近
が忠死を歎く色。岩日森可成が戦死とゆひ遠ゝ及び又ゟや坂井
右近忠功に双の勇士なりしが早くも亡失へる寧ゝそゞも口惜やと
御涙ゟむせ給ふ。扨ても果づる事ゟらぞと切てゝ渠们ゞ繞察
ゟ有る。その一戦とおさんゟ佐と藤吉郎を召信らるゝ山上の敵と勾引出
し合戦させん計策あると訊ね玉へば木下藤吉。その謀略ゟきゟ

ゟらるゝぞ。然ども群卒寒ゟ冒され。国窮もすること久しくなれば。
長く對陣し難ゟ自軍ゟためゟ失利なるべ。遠ゟ敗まを恐
憂さんが退陣もまゝ容易ゟるまし。然とて山上へ攻登らんこと決
して猶利の道なゝん。今既ゟ自軍の陣中。退屈の色と顕れ。国窮
の態ゟなん。方術なくて敵と敵に襲へゟして合戦あゝべ必勝の
利を得ゟ多ふべし。その策計ハ新般〜ゟ如ゟ。ゟ信長思さん
ぞ。跳ゟ高ゟ有り妙ゟ有り遠智器。孫ゟ秀吉ハ神なる歟天なる歟
とぞ歎び称ゟ賞ゟ賞して休ざりゟ。先ゟ準備なさゝでやと諸将
と褒褒玉ひけり

繪本豊臣勲功記二編卷之拾終

安政六年己未八月出版

編輯者　東京　櫻澤堂山

畫工　同　一勇齋國芳

出版人　大阪書林　岡田茂兵衛　東區博勞町四丁目

同　同　松邨九兵衛　南區心齊橋筋一丁目

發賣人　東京書林　山中市兵衛　芝區三島町